

三つの「上手」で幸せに

(一)テサロニケ三・九(一三)

七月に召された日野原重明先生。多くの本を書かれた方だが、恐らく一番ポピュラーなのは『生き方上手』だ。二〇〇二年度の年間ベストセラーの第三位に輝いた同書はいまも売れ続け、累計では二四〇万部を超える。この本はまた学習教材として英訳もされており、その英語には日野原先生ご自身も目を通されたとか。そのタイトルは「Living long, living good」。直訳すれば「長く生きる、良く生きる」となる。確かに長生きだけでは足りない。良く生きることもまた大切なのだ。「良く生きる」、これはクリスチャンライフにとってもまた人生同様大切なことだ。クリスト者として明るく前向きに、神を愛し、人に仕えて生きるか、不平不満に満ちて不安を抱えて生きていくかは、心がけ次第の部分が多々ある。今朝は先にあげた聖句からクリスチャンに必要な三つの「上手」を学びたい。

一、よろこび上手

九節にはパウロの喜びがあふれて

いるのだが、手紙の前後を読むと彼を巡る状況は決して順風満帆といったものではなかった。むしろパウロ自身は行きかけたテサロニケ訪問は叶わず、同法のユダヤ人からは迫害され、苦しみと艱難を得ていた(七節)。英語で言う「オール・グリーン(異状なし)」という状況からは程遠いところに彼らはいたのである。しかしパウロは喜べた。なぜなら彼は喜びを自分以外のところで捜すことが出来たからである。テサロニケ信徒たちの成長を思い、それを成し遂げて下さった神の素晴らしさを思う時、彼の心は無上の喜びに包まれたのである。喜び上手になるコツ、それは自分の内側だけでなく、外を見、そこに喜びを捜すことである。

二、感謝上手

さて神の御前で喜びのゆえにパウロは神に感謝をささげようとしているのだが、彼は「どんな感謝をささげたらよいでしょう」と言う。もちろんこれは「どんな感謝も見つからないので、感謝が出来ない」ということを意味しない。むしろ「感謝が多すぎてどこから始めたらわからない」といった意味であろう。このように使徒の心に感謝があふれ出しているのは彼の心が喜び、特にあらゆる苦難に

打ち勝つ聖霊による喜びを得ていたからである。先の宗教改革五〇〇周年記念大会で購入したジョン・パイパー牧師の『病床で学んだこと』の中には「つぶやくのに聖霊はいらない、クリストもいらない、愛もいらない、信仰もいらない」という厳しいことばがあり、心を探られた。感謝と喜びに生きるために、我々クリスチャンはキリストに目を向け、聖霊の助けを頂きつつ感謝を見つけていくべきである。そうするならば、本当にどのような状況でも感謝が生まれるという奇跡を体験できるのだ。

三、いのり上手

続く一〇(一三)節まではパウロの祈りが書かれているのだが、その祈りを読むとパウロの祈り上手がはつきりと見て取れる。まず言えるのは彼の祈りは実に素直である。二・一八あたりにはパウロが自らのテサロニケ行きが叶わなかったのはサタンの妨げであると断言しているのを見る。しかし彼はテサロニケ再訪を可能な限りひたすらに(直訳)に祈っている。「サタンの企てだから駄目だ」と合理化するのではなく、なお神のみ手が動くように、率直かつ大胆に祈るべきなのである。またパウロの祈りは現状維持のための祈りではなかった。愛が満ちあふれ、教会の中にあるあらゆる不義が打ち破られるよう彼は祈

っている。かのウォルト・デイズニーは「デイズニーランドは何時まで未完成だ。現状維持では後退するばかりだ」と言っていたそうだが、教会も同じである。安住は禁物である。常に更なる恵みの高嶺を求めて、只管に成長を祈っていく。これもまた良い祈りの一典型なのだ。

* * *

日野原先生の名言に「動物は走り方を変えることはできないし、鳥も飛び方を変えることはできない。しかし、人は生き方を変えることができる」というのがある。しかし実際には頑固さやプライド、薄っぺらい自尊心のゆえに生き方を変えられない人が非常に多い。そして「日野原先生はいいよね。生き方上手で」と半ば揶揄するような人もいるかもしれない。しかしクリスチャンライフを生きがい、いやいのちに満ちたものにする事が出来るのは一部のエリートだけではない。生き方の変革は誰の前にも開かれている。神は良いお方、愛のお方であり、私たちを恵もうと待っておられるからである。しかし私たちの側にも一つのことばが要求されている。それはこの喜びと感謝と祈りを自分のものにしてようと信じて一歩踏み出すことである。友よ、やってみてほしい。そして主にある Good Living を満喫しようではないか。